円通寺だより

平成 30 年 7 月
第 106 号

諸行無常の響きあり

諸行無常とは、この世のことは一瞬たりともとどまることはなく常に流動的で変化しているという仏教の言葉ですが、まさに実感する日々です。この度の大雨、洪水の被害でまたしても大勢の犠牲者が出ました。幼い子供達の悲報はよりいっそうの痛ましさを覚えます。もう少し早く避難していたらとか、あの時こうしていたらとかいくら後悔しても嘆いても時を戻すことは出来ません。そして現在の異常なまでの酷暑、自然の力を前にして人間の無力さを感じずには居られません。

今回のあまりに甚大な災害で影が薄くなった感はありますが、まさにこの災害の起きている最中に国家によって 7 人の命が奪われました。オウム事件の死刑囚 7 人の死刑執行です。同じ日に、同時刻に、別々の場所で 7 人同時に行われたというニュースにとても違和感を覚えました。サリンという猛毒を使って大勢の命を奪った行為は決して許されるものではありませんが、死刑に処することは罪の償いになるのかという疑問が沸いたのと、7 人同時という異常さ。死刑で問題が解決したとは思えません。今なおオウム関連の教団が実在し大勢の信者が居て、新たに入信する者も居る中、我々の信じていた教義は間違いであったというメッセージを伝え続け、二度と殺人教団にならないように導いていくのが本当の償いのような気がするのですが。犠牲になった方々の遺族はこれで心の整理がついたのでしょうか。感情論では、理不尽な殺され方をしたのだから同じように命を持って償うのは当然と言うことになるのでしょうが、目には目をと、国家が法の

名において殺人を正当化するというのは、制度がある以上は極刑を望むのはやむを得ないことかと思う反面、仏教の教えを聞いて行く身としては、間違っていると言う声が聞こえてきます。

死刑執行の前夜、その書類にサインをした法務大臣が自民党の議員宿舎での飲み会に参加していたと聞き、その無神経さにも驚きました。国家が許可すれば殺人は殺人でなくなるという事実に少なからず恐怖を覚えました。

祇園精舎

祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きあり、とは、平家物語の冒頭の一節ですが、祇園精舎とはお釈迦様が説法された寺院のことです。阿弥陀経の最初に祇樹給孤獨園（ぎじゅぎっこどくおん）と言う言葉が出てきますがこの言葉を省略したのが祇園です。精舎は寺院のことです。お釈迦様の時代にスダッタという富豪がいて、身寄りのないものを憐れんで食事を給していました。そのため給孤獨（ぎっこどく）長者と呼ばれていました。あるときお釈迦様の説法を聞いて感銘し、お釈迦様が説法するための寺院（精舎）を寄付しようと思い立ちました。説法するのに相応しい土地が見つかりましたがそこはジェータ（祇陀）太子の所有する園林で、ジェータ太子は「その土地が欲しいなら土地の表面を金貨で敷き詰めたら譲ってやろう」と言いました。スダッタは全財産を投げ打ってその土地を金貨で敷き詰め始めました。驚いたジェータ太子は、「それ程までして帰依したい方のためなら喜んで土地を譲ろう」と言い、寺院建立にも協力したためその寺院（精舎）を両者の名前を冠して祇樹給孤獨園（ぎじゅぎっこどくおん）、略して「祇園精舎」と称するようになったそうです。

合掌